

所 報

No. 32

佐賀県教育センター

佐賀県佐賀郡大和町川上

TEL 09526-2-5211

特集号 基礎学力向上対策

もくじ

○ 教育の場に感動を……………	1
○ 基本的作文技能の練習学習について……………	2
○ 歴史学習における意欲を高める指導法……………	3
○ 子どもの体験と理科学習……………	5
○ 「わかった」「できた」を実感させる授業……………	6
○ 理科Iについて……………	8
○ 入門期指導を大切に……………	9
○ 単元指導における評価……………	10
○ 学級経営に創意・工夫を……………	12

教育の場に感動を

佐賀県教育センター研修二課長 桜井直男



あれは、昭和20年であったろうか。わが国が敗戦に向かって、なだれのごとく崩れていくころ。むろん、日本各地が、連日の空爆にさらされていた時である。

そんなある日、原因は判然としないが、何か学友と口論していた時である。ほんの身近に爆撃を受けたのである。地をゆるがすような震動が来て、頭から土砂が降りかかり、気づいてみると、校舎は見事に崩壊してしまっていた。改めて爆弾のすさまじさを知るとともに、震えるような恐怖が身の内から湧く思いであった。

そして、友達顔を見た時、口争いをした相手への怒りや憎しみが、まったく自分の心から消え果てていることを知った。むしろ、生きておれた喜びに手を取り合いたいような衝動さえ覚えたのだった。

時折、その後も、その時のことを考えることがあるが、人間の心の不思議さが思われてならない。何分かの間に、あんなに人の心は変わるものなのかと、間違えば、一瞬のうちに命はなかったはずなのに、生きておれたという喜びに、大きな感動があったからであろうか。思えば、相手に怒りを覚えたという、自分の賢しらな心は、まったくなくなっていた。生きておれたという感動に心が洗われたのだと思えるのである。

心が洗われるといえば、こんなひっ迫した情況でなくても、わたしたちはそれを経験することがある。すばらしい音楽や絵画などに接したり、感動的な話や演劇に魅了されたときなどである。こういう心の状態を、ある人は「人間の原点」に回歸すると説かれるが、もっとわたしたちは、感激や感動を与える教育を行わねばならないと反省させられる。

それで思い起こすのは、小学校の卒業式で、「喜びの歌」をソロで高らかに歌い上げた子のことである。その子は非行傾向の強い問題児であったが、厳粛な式で、別れの呼びかけの中での自分の役割を見事に果たしたのだった。もちろん、それには担任のそれまでの大きな努力があったからではあるが、全員が心を一つにして式典を盛り上げた感動的なその場の構成や雰囲気であったのだと思われる。その子は、涙にむせびながら卒業して行ったのだった。

今の子どもは感動が乏しい、教育の場に心を動かす要素が少ないとも言われる。それこれを思うにつけ、わたしたちは、毎日の子どもとの営みの中に、もっと感動の場を組織しなければならないと考える。人間の意志や意欲につながる心の動きとして感動をとらえ、子どもたちに働きかけていきたいものだと、わたしは思う。

基本的作文技能の練習学習について

今までの作文の授業をふり返ってみると、作文活動はあったが、作文指導がおろそかになっていたのではないと思われる。また、作文指導という点、まとまった作品としての完成度を求めすぎ、書ける者は書けるが、書けない者は取り残されることになりがちであった。一人一人に、生活に必要な表現する力を育てることがおろそかになっていたきらいがある。また、教科書単元でもいろいろな技能を折り込んだ編成がなされているが、一つ一つの技能を定着させていくには十分とはいえない。作文の調査でも「書くことがない」「どう書いたらよいかわからない」というのが多く出ている。

これらのことから、作文の基本的な技能について取り立て指導することが必要だと思われる。

次に、基本的な技能の取り立て指導について、事例をあげながら説明してみたい。これは、ある中学校での授業実践である。

基本的作文技能の練習学習

—書き出しと結びを工夫して書く—

○ この技能を取りあげた理由

この中学校の1年のある学級の生徒たちが書いた作文がある。学校で行われた遠足について、その翌日教室で書いたものである。その作文をみると、書き出しが驚くほど画一化していることに気づく。まず目立つのが遠足のあった「10月28日(あるいは28日)」という書き出しが20名、「きのう」「きょう」「その日」が10名である。つまり44名のうち30名が、遠足の「期日」から書き出ししている。書き出しとして、あまりに画一化しているといっていいただろう。それだけ書き出しの発想が貧弱なのである。

文章の書き出しは、文章の内容や質にかかわってくる。書き出しの文が文章全体の方向を規制するからである。そこで、書き出しとして「期日」以外にどんな書き出しがあるかに目を向けさせ、もっと豊かな書き出しのしかたを身につけさせたいと考えた。

また、結びについても生徒の作品を見ると、

きわめて安易な終わり方をしているようである。結びも書き出し同様に指導する必要があると思われる。

以上のような理由から、「書き出しと結び」の指導を取りあげ、練習学習として1時間で取り扱うことにしたのである。

○ 本時の目標

作文の書き出しと結びの大切さを知り、書き出し・結びを工夫して書く。

○ 本時の展開

段階	学 習 過 程
め あ て	1. 「遠足」の書き出しをどう書いているかを発表し合い、書き出しの欠陥に気づく。 2. 学習の目標と方法を確認する。
手 だ て	3. どんな書き出し・結びがあるかを発表し合う。
確 か め	4. 自分たちがどんな書き出し、結びをしているかを確かめる。 5. 書き出し・結びの書き方をまとめる。
深 め	6. 「遠足」やその他自由な題材で、いろいろな書き出し・結びを工夫して書く。

練習学習は機械的で受身の学習となりやすいが、それでは効率のよい学習は生まれない。

機械的な反復でなく、思考を中心とする学習を考えなければならない。できるだけ生徒たちに考えさせ、自発的に目的をもって学習を進めていくような学習過程を考えたい。

以下、本時の学習過程の各段階について簡単に説明してみたい。

1. めあて

この段階で大事なことは、生徒たちに学習の必要感を持たせることである。そこで生徒たちの書いた書き出しに注目させ、その欠陥(画一化)に気づかせ、書き出しの学習の必要感をもたせたのである。

2. 手だて

どんな観点をもって書いたらよいか、どんな書き方があるかについて考えさせる段階である。教師の説明でなく、生徒たちによってどんな書き出し・結びを書いたらよいか、その手だてを考えさせた。

3. 確かめ

書く観点や、書き方、方法についてまとめ理解させることをねらう段階である。ここでは「期日」以外のいろいろな書き方があることを確かめさせた。また、結びについても、いろいろな方法があることを説明する方法をとった。

4. 深め

取り立てた作文技能について、その方法を理解したことを身につけさせるため、実際に練習する段階である。ここでは「遠足」の作文について、いろいろな書き出し・結びを工夫して書く活動をさせた。本授業では、この練習の時間がじゅうぶん取れなかった(約10分)が、それでも、いくらか豊かな書き出しや結びを書く生徒も生まれた。

この学習で、作文を見る目が育ち、これから書き出し・結びを工夫して書く態度が少しでも育ってくれたらと願っている。

基本的作文技能の学習は練習学習であるからくり返しが大事である。だから、教科書単元や自由作文とのかかわりあい、どこに位置づけるかを考え、計画しなければならない。

(所員 山崎芳昭)

歴史学習における意欲を高める指導法

—身近な素材の教材化について—

1. 歴史学習に関する意識の実態

基礎学力の向上を図る指導の手だてとして、教師と生徒の人間関係の改善、意欲・動機づけ、教材研究、教材・教具の活用、指導形態の工夫などさまざまな方法が考えられる。ここでは意欲を高める学習指導について考えてみたい。そのためには、まず生徒の歴史学習に関する意識の実態を把握する必要がある。

教育センター研究紀要(第6集)に、中学2年生を対象に「歴史学習に関する意識の実態」を調査した結果が出ている。それによると生徒が歴史学習に興味・関心を示しているのは下表のとおりである。

歴史学習で生徒の興味・関心の高いもの	
歴 史 的 内 容	・人々の生活、特に庶民の生活についての学習。風俗・習慣・道具など彼らの生活経験から比較しやすいもの、生活経験と密接な関連のある生活文化。

	・人物学習 ・遺跡、遺物、古い建造物などの観察調査
時 代	・江戸時代が最大。ついで近代、さらに石器・縄文・弥生時代。

2. 生活文化、人物、遺跡・遺物等の身近な素材の教材化の必要性

上表から生徒の関心は歴史的事項の羅列ではなく、具体的なものを通してそれぞれの時代に生きて働く人々の姿やその所在を現代の生活と比較しながら学習するところにあると考えられる。即ち生徒が直接目で確かめ、手で触れることのできる身近な生活文化や遺跡・遺物、その時代をたくましく生きた人々について教材化を図り指導することが学習意欲の高揚につながり、歴史に対する関心を高めることになる。このことは歴史的分野の目標(5)「具体的な事象を通して歴史に対する関心を高めるとともに……

…。」にせまることでもある。

3. 身近な素材を教材化した指導計画の例

「郷土学習」あるいは「人物学習」として、また教科書教材にかわる教材、副教材的な教材、資料的な教材として生徒の興味・関心の高い身近な素材を教材化して適宜取扱うことにより意欲的に学習に取り組ませることができると思われる。その指導計画例をあげてみたい。

月	単元及び学習内容(時配)	指導上の留意点
4月	地形図の読み方 (2) 段彩図・断面図の作成(2) 野外観察の場所、観察・調査事項の話し合い (1) ルートマップの作成 (1) 観察・調査方法、報告文作成の指導 (1) 観察・調査の実施 報告文の発表 身近な地域 (2) ・位置と歴史 ・自然の特色 ・産業 ・人 ・他地域との結びつき	「身近な地域」と「郷土学習」の地歴統合単元として取扱う。 史跡遺跡、郷土の生活文化、土地利用などから調査事項をきめる。 夏休みの課題とする。(グループによる観察・調査) 9月のはじめに発表時間をとる。
9月	報告文の発表 (3) 「近畿地方」 (6) 開国と江戸幕府の滅亡(3)	夏休みの観察・調査を報告文にまとめ発表させる。
10月	人物学習(2~3) ・鍋島齊正と佐賀藩 ・佐野常民と赤十字 ・その他の人物 富国強兵と文明開化 (3) 自由民権運動と立憲政治の成立 (3)	特設単元として「明治維新」を学習した直後に学習する。 ・江藤新平、副高種臣、大隈重信、大木喬任らの中から人物学習として教材化する。

遺跡・遺物の観察・調査でそれらに直接触れたりすることによって、当時の生きた人間の生活を実感としてとらえることができるし、また人物学習についても、その人の業績だけでなく時代背景や人間としての生き方にもふれ、またエピソードなどを織りこんだ楽しい学習ができる。以上は「郷土学習」、「人物学習」の指導計画の例を示したもので、生徒の興味・関心も高く、資料も豊富で、比較的容易に教材化できる。

4. 生活文化の取上げ方

生活文化についての学習は、現在の日常生活の事物と現在の人間を直視すること、つまり現在へ着目して、過去の時代をみていくことが大切である。従って、特に現在の生活にも深いかかわりのあるものを、年中行事、冠婚葬祭、衣食住などの中から取上げることが大切である。

(1) 生活文化の例

- ① 年中行事 正月、雛の節句、端午の節句、節分、七夕祭、彼岸、盂蘭盆、秋祭りなど。
- ② 冠婚葬祭 人の一生にかかわる行事(お宮参り、七五三、成人式、結婚式など)
- ③ 衣食住 庶民の日常生活の中から生まれ、生活の舞台となり、何代にもわたった人々の生活の知恵が凝集され、その地域の自然や生活に応じてつくりあげられている衣食住の風習。例えば、住では「民家と集落」など。

(2) 生活文化の学習の視点

- ① 今日に伝承されてきた生活文化は、そのおこり、変遷と時代背景などそれなりの合理的な存在理由を持つものである。この点を追求の視点としたい。
- ② ある時期、ある時代にあって、それなりの役割を果たしてきたものであるから、それぞれの時代での、意味、役割を明らかにし、現代的意味を付け加えうるかどうかを考える。
- ③ それぞれの時代の政治機構、政策、事件などと、当時の人々の生活とのかかわりや、人々の生活がどのように歴史の進展をうながしたかを生活文化を通してみる。

(3) 生活文化の学習の指導計画への位置づけ

- ① 大単元の学習の終わりのところで、生活文化を主題学習的に取上げ、上述の視点で学習を深める。
- ② 通史学習の中に適時おこむ。特に各単元の文化の学習では文化の羅列にならないよう、教材化を工夫する。各地区での共同研究による教材化が望まれる。(所員 原田 治幸)

— 小学校理科 —

子どもの体験と理科学習

小学校理科(生物領域)講座について

教育が、どういう適性をもつか分からない千差万別の子どもたちの、たった一つのそれを見いだすためになされているとすれば、これほど割りに合わない、歩留まりの悪い仕事は無いらしい。

子どもたちは、10~15年におよぶ長い学校生活の中で与えられる膨大な量の知識・情報の中から、自分に必要とするものをつかみ取って行くのであろうが、いつ、どのような学習で、その適性が引き出されるか——教師はもちろん本人にすら分からないことであろうが——考えると、教育というものが如何に恐ろしく、難しい仕事であるかを痛感させられる。

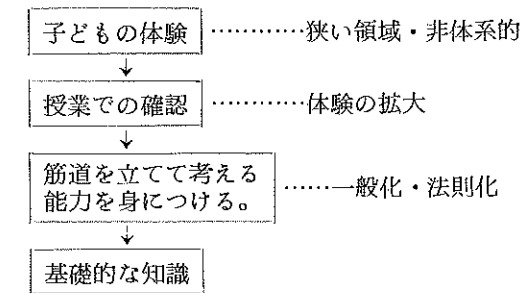
低学年の子どもほど、理科の好きな者が多く中・高学年さらには中学生になるにしたがい、理科嫌いが増加していく。特に女子においては、中学校理科は、嫌われもののトップにある。

子どもは本来、好奇心の固まりのようなものである。野外で、通学途上で、運動場で、それぞれの生活の中で、子どもたちはいろいろな体験をし、体一杯にごっちゃにつめこんでいる。いろいろな物事や現象を、見たり考えたりする体験は、理科教育には不可欠のものである。

この体験の有無・深淺が、学習効果のちがいで出てくるし、体験ぬきの知識の授受のみでは、基礎的な知識にはなり得ない。

学校は、子どもたちの体験を、基礎的な知識に作り上げ、定着させる場であるといえよう。

中・高学年、中学校、高校と、子どもの知的能力の向上にともなって、体験よりも知識の授与に力点が移るために、理科が、面白くない暗記科目として位置づけられるものと思われる。



以上のべたように、理科学習の基本は、子どもたちに体験させることである。小学校における「採る」「飼う」「育てる」「見る」「さわる」「作る」「こわす」などの行為は、高学年、中・高校の学習に必ず生きてくると思う。

指導要領にも強調されているように、子どもたちの、自然にはたらきかける活動、直接経験による理科学習——体験の蓄積に力を注ぐことが、今後ますます必要であると考えられる。

- ◎小学校理科(生物領域)講座について
- 今年度の小学校生物領域の講座のうち、
- ①植物の野外観察——植物どうしの関係(6年)
- ②昆虫の飼育と観察(4年)

1. 植物の野外観察

指導要領に強調される直接経験による理科学習では、子どもたちを野外に連れ出す機会が多くなることから、森林の木や草のようすと中心に講座を計画した。

- 森林の層状構造と日光の強さ(照度の測定)
- 一本立ちの木と林の木の違い
- 林縁の植物のはたらき——森林をおおう植物
- 日なたと日かげの植物のちがいなど

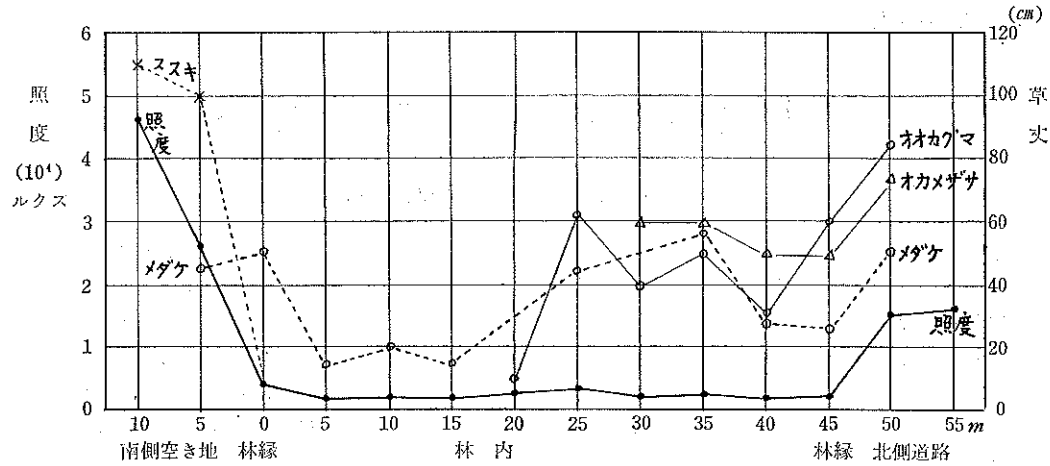
森林の植物の指導は、観察に適した森林が近くにないという学校も多く、指導内容も難しい単元である。受講の先生方の教授資料になるような点に重点を置いた。

特に、林の内外の明るさと植物の育ち方については、面白い結果が得られた(図1)。

2. 昆虫の飼育と観察(4年)

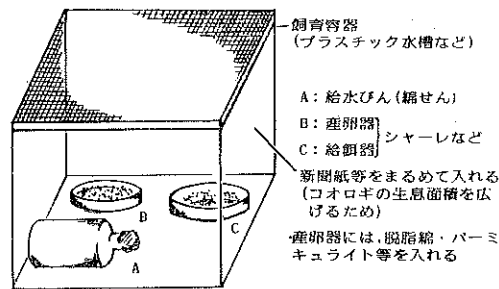
子どもたちの身近に、いつも生物がいることは、子どもの興味関心を育てる大きな助けとなり、継続観察は、生物領域の大きな目的の一つである。しかし、多忙な学校行事の中では、飼育が簡単でなければ、教材生物として適しているとはいえない。

本講座では、カイコ、モンシロチョウ(以上、完全変態)、スズムシ、フタホシコロギ(不完全変態)を使用したが、他の3種はよく利用されているので、ここでは、フタホシコロギの教材生物としての利点を紹介したい。



(図1 森林の内外の明るさと植物の育ち方〔教育センター裏山57.7.27〕)

①フタホシコオロギは、石垣島産の亜熱帯性コオロギで、ふつう見られるエンマコオロギ、スズムシなどが一化性(年一回の産卵・ふ化)であるのに対し、年間4~5回産卵・ふ化をさせることができる。したがって、年間を通して、



(図2 フタホシコオロギの飼育容器)

卵・幼虫・成虫を得ることができる。
 ②飼育が簡単であること。プラスチック水槽、プランター、コンテナ等、20cm以上の深さの容器であれば、何でも飼育容器となりうる。
 エサは、金魚のエサをそのままか粉末にして浅い皿に入れて与え、水は、空ビンの口にやや固めに脱脂綿をつめて、容器の底に横に倒して置いておく。コオロギは、綿から水を吸い取る。
 ③幼虫時代に7~8回脱皮をするので、昆虫の成長のしかたを観察するのに適しているし、卵の中の発生中の胚の観察もできる。
 ④精巣による減数分裂の観察ができる(高校)。
 飼育希望の方は、生物研究室まで、ご連絡ください。(所員 申嵐 隆之)

小学校算数

「わかった」「できた」を実感させる授業

授業終了後、子どもたちから「ああ楽しかった。」「きょうも新しい内容がわかった。」「できるようになった。」という学習した喜びの声が聞かれるような、そして、子ども一人ひとりの顔に、満足感、成就感、充実感を味わうことができたという表情がみられるような授業でありたいと念じている。
 そのような授業をめざして、次のような4つの基本的態度を学習過程に位置づけた授業を考えてみたい。
 ※ 1時間の指導にあたっての基本的態度

1. 基礎基本を確実に定着させるために、1時間の学習の中で基礎基本事項を明確にとらえる。
2. すべての子どもに活動の場を与えるために課題解決、発見学習の学習法と小集団学習(グループ学習)を取り入れる。
3. 形成評価を診断として位置づけ、すべての子どもに基礎としての内容を身につけさせるようにする。
4. 個人差に応じた練習問題を準備し、理解度、学習のスピード差に応じて、自由にドリル、

深化学習ができるようにする。

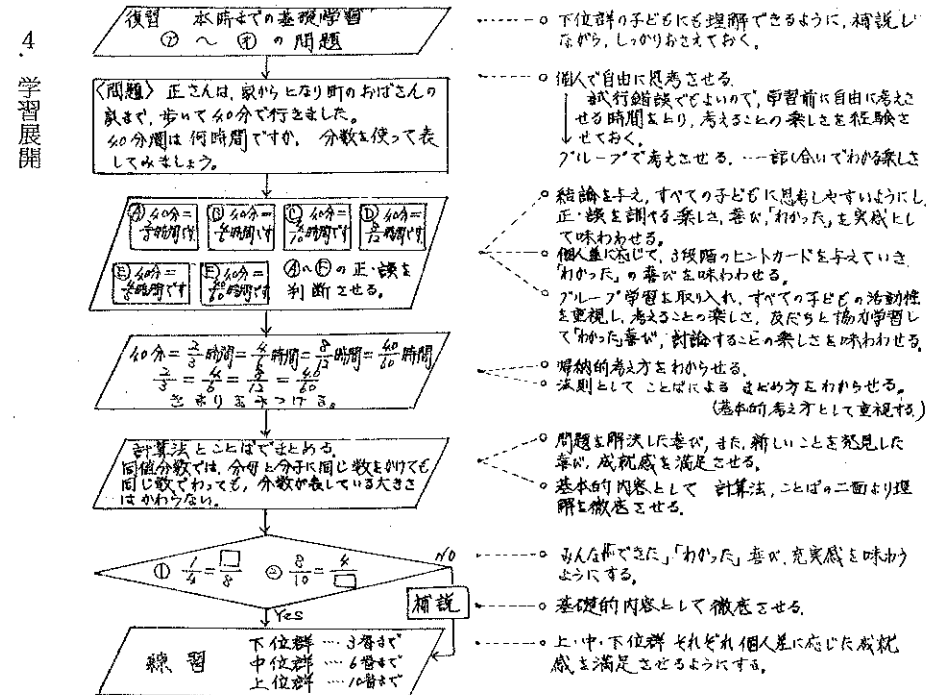
< 実践例 >

1. 単元 五年 分数の計算 I
 小単元 同じ大きさを表す分数 (1/5時)

2. 本時の目標
 分数の分母と分子に同じ数をかけても、同じ数でわっても、分数を表す大きさはかわらないことを理解させる。

3. 基本的態度
 (1) 学習内容の基礎基本
 ① 本時までの基礎学習 (学んだ内容)
 本時学習の土台となる内容で、このことが身につけていないと本時学習の理解ができにくいと思われる内容

- ア) $1m$ を5等分した3つ分は $\frac{3}{5}m$ であるといえる。
 イ) $\frac{3}{8}$ は $\frac{3}{8}$ であることがいえる。
 ウ) 数直線で $\frac{2}{3}$ の位置を表すことができる
 エ) $\frac{4}{7}$ は $\frac{1}{7}$ を4つあわせた大きさであることがいえる。



オ) いろいろの分母の分数を数直線の上に表したのから、同値の分数をみつけることができる。
 ② 本時の基礎学習 (学びとる内容)
 次の学習の土台となる内容で、本時でどうしても身につけさせておくべき内容
 ア) $\frac{6}{9}$ は $\frac{2}{3}$ と等しいことが説明できる。
 イ) $\frac{1}{4} = \frac{\square}{8}$ や $\frac{8}{10} = \frac{4}{\square}$ などの \square をだすことができる。など
 ③ 本時の基本学習 (学び方の内容)
 この考え方は、今後の学習である約分・通分・異分母分数の計算・分数のかけ算わり算の基本的考え方となる。
 この学習過程において、帰納的学び方を身につけさせる。
 分数の分母と分子に同じ数をかけても、分子と分母を同じ数でわっても、分数が表している大きさはかわらない。
 (2) 課題解決、発見学習の学習法と小集団学習を取り入れる。
 (3) 形成評価を診断として位置づける。
 (4) 個人差に応じた練習問題を準備し、個別化学習により、習熟の徹底をはかる。

(所員 久池井 浩)

— 高校理科 —

理科 I について

はじめに

指導要領が改訂され、今年はその実施第一年目である。昭和53年から、その事前指導や説明会が何回か行われてきたが、そのなかで理科 I は従前の高校理科とは内容が異なっている。そこで、その性格を要約すると

- (1) 国民的教養としての自然科学的な知識や理解を深めること。
- (2) 中学校理科と高校選択理科との橋渡し。
- (3) 観察・実験を通して、基本的科学概念の形成と科学の方法の習得。
- (4) 自然についての総合的な見方や考え方の育成を通して、自然環境に関する科学的認識や理解を深める。

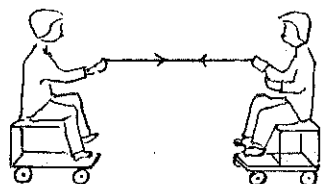
となる。教師は、これらのことが生徒一人一人のものになるような努力をしなければならない。ここに理科 I が従前の高校理科と異なる点を若干とりあげてみたい。

1. 物理担当教師による化学の授業の魅力

高校理科では、各教師とも専門とする分野があり、それを中心に授業を行っていたが、理科 I では一人で担当するのが望ましいことから専門分野外の授業をすることになる。このことについて、当時文部省視学官であった伊藤先生は、案外生徒は喜ぶのではないかと云って居られた。最近の物理教育誌 (Vol 30, No 1) に、実践記録の報告がなされていたので、その一部を紹介する。なお、この筆者は物理専門の教師で、昭和56年に次年度から理科 I が始まることに備えて、化学の授業を行ったときの体験記である。

『① 先ず、化学実験の興味づけの多様さに驚く。これに比べ物理実験時の生徒の感動のなさ、最もショー的な空中衝突や慣性の法則のナイスキャッチなども生徒にとってはあまり感動的ではないらしい。当り前の顔をしている。化学では、色あり、煙あり、火ありでその都度歓声があがる。

②事項の説明も自分流に解釈して、わかりやすい言葉で話すので生徒にとっては理解しやすい



らしい。一方、自分の専門とする分野ではこんな事ぐらいわかるはず、との先入感からとかく説明が粗末になりやすい。

③専門の授業より、生徒が熱心に聞いてくれるようである。等々』

短い体験記であったが、自分の従来の授業の反省をこめて書かれている内容には教えられるものがある。よく経験することだが、教師デモ学験中に実験が失敗したり、うまく出来ないときによく生徒達は笑う。生徒達は、実験がうまく成功することを期待する反面、一方ではうまくいかないこともありうるぞという気持ちを持っていることも事実だろう。専門外教師による理科 I の授業や実験は、教師側にとっては多少苦痛かもわからないが生徒達にとっては、わかりやすい魅力のある授業になる可能性も十分あると思われる。

2. 新しい視点に立つ実験観察の内容や方法の開発

理科 I は身近に見られる事物や事象を通しての学習が望まれている。従来専門とする教師が行ってきた実験観察とは異なる方法での新しい試みは、専門外教師がもつ魅力の一つかも知れない。前掲の体験のなかにも事例報告がなされていて、専門とする教師から激賞された内容も紹介されていた。又、実験も演示的なものであれば教室でも、しかも身の周りのもので出来る場合もある。しかし、これらのことも専門とする教師がその相談相手となってはじめて実行可能なことであることはいままでもないが、要はそれを実行する勇気をもつことが大切であろう。大研究者といわれる人ほど、数多い失敗の経験者だという。

3. 指導計画のもとに

理科 I は一人担当が望ましいとされているが、実際には二人分担の場合もあると思われる。この場合、年間指導計画の下での連携が非常に大切である。これが十分出来ていないと切角のユニークな理科 I の目的は十分達成できない。又、理科 I に関する指導参考書も数多く出版されたり、県によっては指導事例まで作成されているところもあるようである。自分が直接教える生徒に最も適当と思われる自分のあるいは自分達の指導計画をたてることが重要であろう。

以上、理科 I の指導にあたっての教師側の問題点をいくつかとり上げたが、一方授業を受ける生徒側にも多少問題はあるであろう。最近の一般的傾向として、結果のみ正しければ途中の過程は軽視する、面倒な計算はいや、手を汚してまでしたくない、等々では本当の学習はでき

— 高校英語 —

「入門期指導を大切に」

はじめに

外国語 (英語) 科の新学習指導要領は、つぎの3つの基本方針に基づいて改訂されている。

- (1) 学習内容 (言語材料) の精選
- (2) 言語活動の重視
- (3) 表現力の重視

そして、中・高一貫教育を重視する意味で、中学校と高校の連携に対する配慮がなされ、英語の基礎学力は、中学校3年間の英語と高校で学ぶ「英語 I」の履習によってはじめて身につくと言われている。中学校での英語の授業時間数の削減に伴い、これまで中学校で学習していた多くの言語材料が高校へ送られ、総合的に英語を学ぶようになったため、「英語 I」は中学4年生向けの科目とも言われている。

しかし、中学と大学との間にあって、3か年でほう大な言語材料をこなし、かなり高度なレベルまで英語の学力を高めなければならない高校での英語指導は、入学してきた生徒に対する高校入門期にこそ、もっとも慎重に対応しなければならないだろう。

1. 高校入学時の指導について

中学校の週3時間体制から生ずるいろいろな問題の中で、記憶の維持・学習の定着というこ

ない。ここで教師はどうすべきか。先日、全国大会の席上で文部省の飯利調査官は「教師は大いに手足に汗して (あるいは手足を汚して) これは是非覚えるところ・是非理解しておくべきところでは、多少生徒が横を向いていてもこちらを向かせて、ねばり強く教え込むような教育をしてもらいたい。」と云って居られた。

理科 I は、目標や性格に照らし生徒の実態に即応した指導展開が可能であるので、教師の能力が大いに発揮される場所であり、更にその結果が選択理科への前段としての重要な位置を占めている。それだけに生徒の能力、適性、進路等を考慮し、創意工夫をして理科 I の一層の充実を図るべきであろう。

(所員 野中 亮)

とが大きな課題となっている。たしかに、本年4月に実施された「新1年生学力テスト」の答案で、「語い」と「文法事項」の誤答を分析してみたら、中学の教科書に言語材料として扱われていて使用頻度の低い「語い」や「文型、文法事項」については、誤答率が極めて高いことがわかった。

しかし、高校入学時から数か月の間、中学英語の復習をさせる中で、中学では、全く使われていない文法用語をしばしば用いて指導されているようなこともよく耳にするが、もし、中学を卒業し、晴れて高校生となり、あらたな気持ちで勉学に取り組もうとしている新入生に、中学で学んだ文型、文法事項のみを詰め込み式に数か月も復習させられるならば、学力のある生徒にとっても、学習意欲の阻害になるだろう。それよりも、高校入学時から絶えず英語の学習法について、生徒の側に立って、きめのこまかな指導をすることが必要である。

- ・ 明確な英語学習の目的意識をもたせる。
- ・ 忍耐強く、継続して学習させる。
- ・ 反復、くり返し練習させる。
- ・ 音読や発話をして音声を重視させる。
- ・ 覚えたことを応用し、実際に使わせる。

- ・ 日本語の発想と比較させる。

このほか、辞書の使用法や学習参考書の利用法など、ともすると受動的になりがちな高校での英語学習に対して、生徒が主体的・積極的に学習する方法を指導する必要がある。

また、中学校と高校の連携が重視されている中で、高校の教師は、つぎのことに留意すべきであろう。

- ・ 中学校の教科書の検討。
- ・ 中学校の指導要領の検討。
- ・ 中学校の授業の指導過程の検討。
- ・ 新入生の実態調査(学力だけでなく、学習意欲や学習習慣について)
- ・ 言語活動についての指導計画。

「英語Ⅰ」の目標である「英語を理解し、英語で表現しようとする態度を育てる」ためには、学ぶ側の生徒のことを十分考慮して、教師が自発的に創意工夫をすることが必要である。

2. 表現力を高める指導について

英語学習の言語活動として、「聞くこと・話すこと」、「読むこと」および「書くこと」の3領域で「調和を保つ」ことが望まれているが表現力重視が叫ばれている中で、従来のリーダーの授業のように、文法訳読式の受容的な理解中心の授業展開だけでは、表現力を高める十分な指導は望めない。

(1) 音声重視の授業

「英語Ⅰ」の言語材料の中には、プロダクションの段階まで高めなければならないものが多く含まれており、文字と音声の両面を重視した指導がとくに望まれる。総合的な英語学習の中で、英語の発想や表現形式に慣れさせるために

は、とくに音声重視の授業展開が必要だろう。

(2) 基本文の暗唱・暗写

「書く能力」は、「話す能力」および「読む能力」と密接に関連しており、また、「語い」や「文法」力がなければ、表現力の成立は望めない。中学で学んだ文型・文法事項を含めて、日頃から基本文型や重要表現の暗唱・暗写をさせる必要がある。

(3) 自己表現の機会を与える

高校での英語の授業は、「読むこと」および「文法」のドリルに片寄りすぎて、生徒の学習意欲を減退させているのではないか。生徒の思考力を育て、学習の励みとなる活動として、英語による自己表現の機会を、高校入門期から、少しずつ与えることも表現力養成へつながるものだと思う。生徒の学力を考慮しながら、事前に話題や課題を与えて準備させ、1分間や2分間のスピーチをさせたり、手紙文の返事を書かせたりすることも表現力養成のひとつの手段だと思う。

おわりに

「英語Ⅰ」は、教科書が一冊となり、中学4年生に教えるつもりで指導すべきだと言われるが、多様化している高校の現状の中で、中学のように画一的な規制はできない。新鮮な期待を持って入学してくる生徒たちに「英語Ⅰ」という新しい科目で、英語の基礎学力を再構成してやるには、総合的な英語の授業を効果のあるものにするにはどうすべきかを、教える側からだけでなく、生徒の側にも立って確認し、授業実践をとおして、指導技術を磨くことが必要だろう。(所員 宮原 都明)

あるかなど、表Ⅰの評価目標の分類について、

(表Ⅰ) 評価目標の分類

- ① 知識、理解
- ② 思考、創造
- ③ 技能(作品、表現)
- ④ 態度、鑑賞、習慣

それぞれの学力の構造や相互の関係、特質について理解しておくことである。この理解の上に立って、

それぞれの教科教材の指導目標を明確にしていくべきである。

この指導目標は、子どもが学習した結果どんなことができるようになるのか、学習によってどのような変容を期待するのか、できるだけ行動的な目標にすることである。

(2) テストの諸技術をよく知り、目標に適切な組み合わせ方について理解すること。

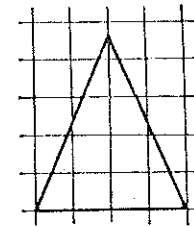
いろいろなテストの技術について精道しておきたい。たとえば・論文体テスト

【主として創造力に関するもの】

(論文体テスト)

たとえば、6という数字は、次のようにいろいろ考えることができます。

- ・ 5のつぎの数(整数)です。
- ・ 3+3と同じ大きさを表わしています。
- ・ 2の3倍の大きさとみられます。
- ・ 12や18の約数で、いちばん大きい数です。
- ・ 上下にさかきになると9になります。



上の図形についても、考えられることをできるだけたくさんかきなさい。

・ 客観テストの中の再成形式のテスト(単純再生法、完成法、訂正法など)

【主として思考力に関するもの】(再生法)

3、4、5、6の4枚のカードから、3枚をとり出していろいろな数を作りたいと思います。次の1~4の条件にあてはまる3けたの数はそれぞれ何個ずつ作れますか。その個数を求めなさい。

- 1 偶数 答
- 2 奇数 答
- 3 3の倍数 答
- 4 4の倍数 答

・ 客観テストの中の再認形式のテスト(真偽法、選択法、組み合わせ法など)

【主として理解に関するもの】(多肢選択法)

Aを10以下の自然数、Bを2から10までの偶数の集合とするとき、次の関係のうち、正しいものを2つ選び、記号で答えなさい。

- ア $A \cap B = A$ イ $A \cap B = B$
- ウ $A \cup B = A$ エ $A \cup B = B$

これらのテスト法は、それぞれどんな特徴があるとか、どんな長所短所があるかということを知っておかなければならない。そして、それらがどの目標の測定に適合するかの妥当性や信頼性等において、互いに異なっていることを知らないと、よい問題はできない。

なお、作問の場合、限られたテスト技術に偏らないように注意することも大切である。

3. おわりに

実際に作問する際は、以上のことをふまえて、指導した内容についてテストしようとする評価目標を決め、それぞれの目標に対してどの技術が最も妥当であるのか、信頼性があるのかをよく考えて、作問すべきである。更に評価情報は、到達状況の診断となつてはじめて次の指導につながることをおさえておきたい。

(所員 井樋 章夫)

— 教育評価 —

「単元指導における評価」

— 評価テストの基本的な考え方 —

1. はじめに

一人ひとりの子どもに学習を成功させるためには、指導過程において、随時必要に応じて学習の習得がうまく進んでいるか頻繁なチェックが必要であり、それを次の指導に生かしていくことが大切である。このように学習の評価は、指導と密接につながっていなければならない。

今回は、単元指導における評価テストの方法について考えてみたい。

2. 基本的な考え方(よい問題をつくるには)

(1) 評価目標を明確化すること。

たとえば、「理解」とはどんな構造をなし「知識」とどんな関係をもった学力であるのか、「技能」とはどんな構造や特質をもった学力で



— 小 学 校 —

学級経営に創意・工夫を

新採のY子先生へ

お便りありがとうございます。教壇に立って半年過ぎ、やっと、授業中に子どもたちのいろいろな表情が見え出した由、私も20数年前を思い出し、思わずほほえんでしまいました。

さて、おたずねの「基礎学力向上のための学級経営上の創意・工夫」についてですが、創意工夫は聡明なY子先生に期待することにして、心がけたいこと、指導したいことを思いつくままに列記してみます。

- (1) 学習習慣の確立
- (2) 教室環境づくり
- (3) 学級の雰囲気づくり

1. 学習習慣の確立では

- 聞く態度 ・ 発表者の顔をみる ・ あざ笑ったりひやかしたりしない ・ 発表者に対して質問や意見がいえる ・ メモをとる
- 発表のしかた ・ 挙手をしっかり ・ 返事をはっきり ・ 姿勢を正しく ・ 語尾まではっきり
- 書く姿勢 ・ 正しい鉛筆の持ち方 ・ 書面と目の距離 ・ 背すじを伸ばす
- 家庭学習 ・ 課題を確実にやる ・ 予習復習の徹底 ・ 毎日一定時間の継続化
- その他 ・ チャイムと共に学習に取り組む ・ 提出物の期限厳守 ・ 学習用具を忘れない ・ 協力して学習ができる

特に家庭学習を確実にやらせるには

- ・ 帰りの会で課題を確認しメモをとらせる
- ・ 学習のポイントを持たせる
- ・ 一日の目標時間をきめさせる
- ・ 学習計画（日課表）を立てさせる

等が大切です。学習習慣とは、毎日の生活の中で学習に関係したことを繰り返し行っているうちに安定したものになり、意識しなくても回復できる状態のことだと考えましょう。

2. 教室環境づくりでは

- 掲示物 ・ 月毎の学習目標 ・ 学期ごとの個人の学習目標 ・ 教師が学習に関し、感じたり考えたりしたこと ・ その月の学習ポイント ・ 単元ごとの学習のまとめ

め ・ 標語 ・ 図画 ・ 係だより ・ 学級の歌 ・ 季節の歌 ・ 詩 ・ 作文等
掲示物の作成、掲示で配慮することは

- ・ 誤字脱字のないように ・ きちんとはる ・ 字の大きさ、配色、配置の工夫
- ・ 常に新しいもの ・ 清潔感 ・ 季節感
- 備品、コーナー、ファイルとして
- ・ 視聴覚器具の配置 ・ 学習課題黒板の活用 ・ 次時の学習連絡板の活用 ・ コーナーの見出しに立体感

環境づくりは、あくまで児童と教師の共同作とし、教師と児童、児童と児童の人間関係を深めることに留意して欲しいものです。

3. 学級の雰囲気づくりでは

- 協力、助け合い ・ 弱い子、遅れている子を孤立させない ・ 学習することを互いにかくしたり、他人の足を引っばるようなことはしない ・ ものごとをゆずり合ってきめる ・ 協力して学習をすすめる
- ・ 一人一人を認め合う ・ いたわり合い相手の立場を尊重する ・ 親しみやすく厳しさがある
- 発言、話し合い
- ・ 思ったことはどんなことでも発言できる ・ 発言ルールを守る ・ 自分の発言に自信をもつ ・ ひやかしたりしない
- 明朗、活発、思考力、実行力
- ・ 笑顔があり発言や行動に活発さがある
- ・ 深く考えることができる
- ・ きまったことは守り実行する

学習を支えるものとしての学級集団は、安定した集団、前進的な集団であり、互いにほめ合い、高め合う雰囲気を持つことが望まれます。

最後になりますが、学習に立ち向かう学級づくりには、いろいろな方法がありましょう。が創意・工夫していく大きな動輪は、ひとつの知識やその理解に対するあなた自身の感動であることを、いつまでも忘れないでください。

(所員 末次 晃)